

第2章 事例研究

1. 3歳児事例

西多 由貴江

事例1 サッカーごっこ

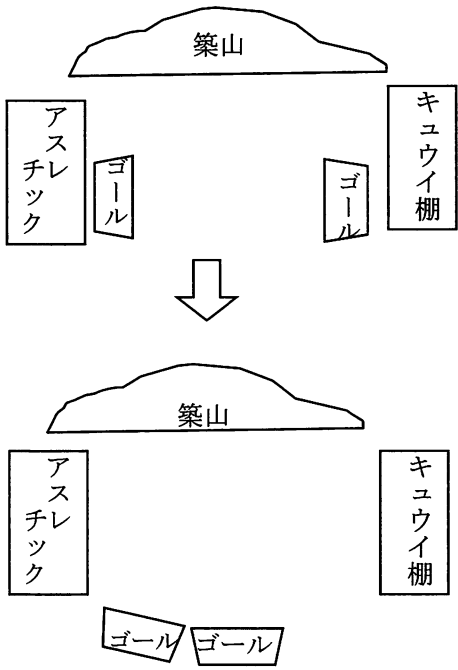
6月5日（火）

昨日、T児の「サッカーしたい」の言葉から、T児、N児、S児、教師でサッカーごっこを始めた。幼児はボールをゴールに入れることを繰り返した。

この日もT児は、登園するとすぐに「今日もサッカーする」と教師に伝えにきた。自分の身支度を終わると、「先生、きて」と教師を遊びに誘い、サッカーごっこを始めた。その後、N児、S児、その他数人の幼児も加わり、サッカーコーナーがにぎわってきた。幼児は、思い思いにボールをゴールに蹴りいれていた。教師はやりたと思った幼児がボールを蹴ることができるように大小合わせて5つボールを提示した。また、幼児がお互いにやっていることが見えるように、ゴールを並べて置いた。T児らはかわるがわる自分の好きなボールを使い、ゴールにボールを入れたり、蹴ったりすることを楽しんでいる。

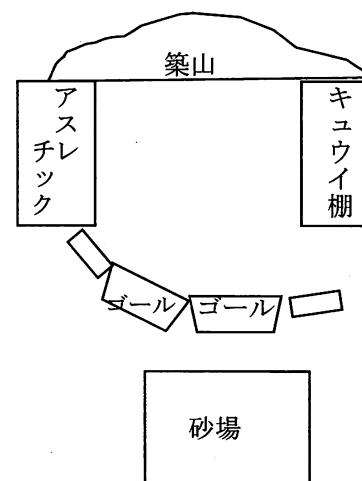
しばらくするとそばで遊んでいたF児、B児が、ボールを築山の上から転がした。そのボールがゴールに入った。その後もF児、B児は築山からボールを転がしたり、蹴ったりして、ゴールにボールを入れていた。その様子を見たN児、S児らがF児らの真似をし、築山の上からボールを蹴り始めた。T児は「先生、きて」と教師を誘い、教師と一緒に築山の上に登った。T児も築山の上からゴールの方にボールを転がした。しかし、途中で止まってしまった。F児、B児がボールを築山から転がし、そのボールを追いかけて、追いついたところでボールを蹴り、ゴールに入れていた。教師は「面白い遊び考えたね」と声をかけた。その様子を真似て、T児もボールが止まった所までおりてきてボールを蹴って、ゴールに入れた。教師が「入った」「おもしろいね」とT児に声をかけた。T児もすぐさま、ボールをもち築山に登り、ボールを蹴った。その後も繰り返し、築山の上からボールを転がしてゴールに入れることを楽しんでいた。

何度が繰り返したのち、T児が築山の上からボールを蹴った時、ゴールには入らずボールは砂場の方に転がって行った。しかしT児は自分一人でボールを取りに行けず、「僕のボール・・・」と教師に助けを求めてきた。T児は、友達が遊んでいる場所に一人で行くことができず、これまでも教師に助けを求めにくることがあった。

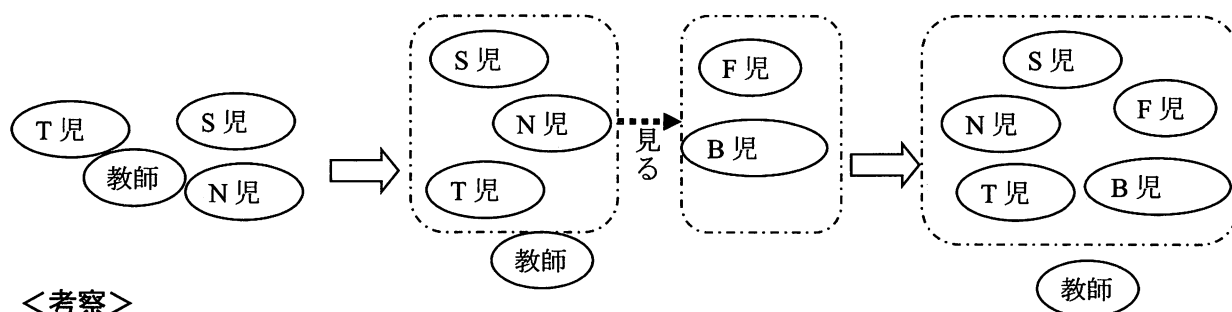


そこで、教師はT児と一緒にボールを取りに行くことにした。
T児はボールを拾うと、再び築山に登っていった。教師は、
ボールが遠くに転がらないように、ゴールの横にベンチなどを
置いて、空間を仕切った。

T児は、その後も築山の上からボールを蹴ったり、投げたり、
転がしたりしていた。そして、自分のボールと一緒に走り降り、
ボールを蹴ってゴールに入れている。ゴールに入らず、ベンチ
などにあたって跳ねかえったボールを追いかけていた。築山か
ら走り降りる時、転ぶこともあったが、自分で立ち上がり、繰
り返していた。



<関係図>



<考察>

○遊び込む姿

・「没入している」状態、集中している状態

T児は、母親となかなか離れることができず、泣きながら登園することもあった。しかし、
教師とのかかわりの中で、自分から「サッカーしたい」と自分の気持ちを伝え、遊び始める
ことができた。最初は教師がそばにいないとボールを蹴ることができなかった。しかし、次
第に教師のそばを離れ、友達のそばで遊び始めている。さらに、友達の姿を真似て築山の上
からボールを転がしたり、蹴ったりしながらゴールにボールが入るよう繰り返している。こ
の姿をサッカーごっこに主体的にかかわり、集中している姿だと捉える。

・子ども達ならではの発想によって遊びが展開継続している過程にある状態

T児はボールを蹴る、ゴールに入れることを楽しんでいた。その後、B児らの遊び方を見て、
同じようにやっている。友達の遊び方をおもしろそうだと捉え、自分の遊び方を変化させた。
さらに、ボールが築山の途中で止まることやゴールに入らないことなど、思い通りにならな
いことがあると、教師に助けを求めたり、友達の姿を真似たりしている。このように自分の
やりたいことが継続できるように、自分なりに楽しめる遊び方を見つけていく姿を見ることが
できた。

・遊びの素材を使いこなし、我がものとしていく状況

ゴールにボールを入れるために、ボールの蹴り方や蹴り始める位置を変化させながら自分なりに考えている。しかし、築山の上からゴールに入れる時、築山の斜面の凹凸や草の長さなどから、やるたびにボールの転がり方が変化する。T 児はその偶然性を遊びに取り入れ、楽しんでいる。さらに、築山から走り降りるスリルと爽快感は、遊びの楽しさの要因となっていると考える。転んでも、繰り返し取り組む姿から、ボールとゴールだけではなく、築山の自然を自分なりに使いこなし、我がものとしていこうとする姿だと考える。

○環境の構成

・ゴールの位置（築山との関係）

T 児らにとってサッカーは、チームで対戦するものではなくゴールにボールを入れることであつた。そこで、一人一人がボールをゴールに入れることが大切だと考え、2 つのゴールを並べて置いた。幼児はゴールに向かって友達と同じ方向を向いて楽しむことができた。そのため、友達の姿を見て真似るなど、遊び方を変化させていく姿につながったと考える。また、ゴールを築山と向かい合わせに置いたことで自分達の区切られたスペースができ、安心して取り組む空間ができた。そのため、T 児は教師のそばを離れ楽しむことができた。

○教師の援助

・幼児が見つけた遊び方を認め、共に楽しむ

築山からボールを蹴り、ゴールに入れる遊び方は幼児の偶然の動きから始まった遊び方である。しかし、教師が「おもしろい」と認めたことで、幼児らは自分達の遊び方に自信をもち、繰り返し楽しむことができた。また、教師がそばで一緒に遊び共に楽しむことは、T 児に安心感を与え、遊び込む姿を支えたと考える。

<カンファレンスを終えて>

○遊び込む姿

平面で行うサッカーの概念にとらわれることなく、築山の高低差を利用すること、また、ゴールを並べて置き、周りをアスレチックやベンチなどで囲ったことで、少しぐらい違う方向に蹴っても、跳ね返り、すぐにゴールに蹴り入れることができた。そのため、ゴールにボールを入れることを楽しんでいた幼児にとって魅力的な場となり、継続して遊ぶことができる遊びになっていったのではないかと考えられた。

○環境の構成

・ゴールと築山の関係

カンファレンスの中でゴールを築山の向かいに置いたことで、魅力的な場となり、遊びが展開していったという意見が出された。また、この環境に意味があったと話し合われた。遊具や用具の位置関係を考えたり、園庭などの自然をうまく使っていくことが大切であることを改めて考えさせられた。

また、ゴールを築山の前に置いたことで、偶然ではあったが、新しい遊び方がうまれた。教師は、毎朝の環境づくりはもちろんであるが、幼児の遊びの様子を見ながら環境をつくりかえていくことも必要である。そのためにも、教師がねらいや願いを明確にしかかわっていかなければならない。

○今後に向けて

T 児は、新しい場に移動する時や友達がたくさんいる場に行く時など、自分から動くことができず、教師の助けを求めにくる。この姿からも、十分に安心して自分の力を発揮するには至っていないことがわかる。今後、教師がそばに居続けなくても、安心して遊びこむことができるように、かかわっていくことが必要である。



10月中旬、のびのびフェスティバル（運動会）が行われた。その中で、4歳児が踊った忍者の踊り、5歳児が踊った宇宙戦艦ヤマトの踊りが気に入り、真似て踊る幼児が増えていった。初めは、一人一人お気に入りの色の衣装やアイテムを身につけ、音楽に合わせて踊ることを楽しんでいた。繰り返し楽しむことで友達の姿にも目がむき、「（振付をしながら）こうだよ」と友達に踊りを教えたり、「順番ね」と隊形を変化させたり、4歳児や5歳児の踊りを再現して踊っていた。クラスのほとんどの幼児が、入れ替わり立ち替わり参加していた。

この日も登園時の活動を終えたB児、F児らがテラスでCDをならし、踊り始めた。その後、登園時の活動を終えた幼児が数人加わり、音楽に合わせて踊っていた。しばらくすると、K児が円柱型のジュニアブロックを積み、それを太鼓に見立て、ソフトブロックをバチにし、音楽に合わせてたたき始めた。その姿を真似て、F児も円柱型のジュニアブロックを積み、たたき始めた。二人は音楽に合わせて、歌を歌いながら、太鼓に見立てたジュニアブロックをたたいていた。周りの幼児らも鈴やタンバリン、カスタネットをならし、演奏ごっこが始まった。

教師は、ブロックをたたくよりも音になる方が楽しいのではないかと考え、牛乳パックと段ボールでつくった太鼓を提示することにした。教師は、音楽に合わせて段ボール太鼓をたたき、参加した。

K児 「先生、貸して。俺、やってみたい」

F児 「俺もやってみたい」

教師 「でも、一つしかないからな」

K児 「じゃあ、もう一個つくったらいいんじゃない」

教師 「そうか、でも一人でつくるの大変だったから。

手伝って」

K児 「いいよ」

B児 「俺も手伝う」

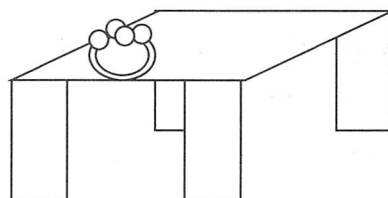
と、一緒につくった。1つ目の段ボール太鼓をK児、2つ目の段ボール太鼓をF児が使うことになった。それぞれが思い思いに演奏したい楽器を選び、忍者の曲に合わせて演奏した。

K児が、段ボール太鼓の上に鈴を置いて、太鼓をたたいた。そのあと、タンバリンを置いて、太鼓をたたいていた。その姿を見て、F児も同じようにやり始めた。教師が不思議そうな顔で見ている。

K児 「だって、この方がおもしろいよ」

教師が、首を横に傾けた。

K児 「いろんな音なるでしょう」



そう言って、タンバリン、鈴、カスタネットを順に段ボール太鼓にのせて音をならして聞かせてくれた。

教師 「へえ～、おもしろいね」

その後も K 児、B 児、F 児は音楽に合わせて、順番にいろいろな楽器を組み合わせ、演奏ごっこを繰り返していた。

＜考察＞

○遊び込む姿

・「没入している」状態、集中している状態

K 児はのびのびフェスティバルの翌週から、4、5 歳児が踊っていた踊りに興味をもち、繰り返し音楽に合わせて踊ることを楽しんでいた。1 カ月近くたったこの日も、忍者の踊りの音楽に合わせて体を動かすことを楽しんでいた。また、この日は踊るだけではなく、音楽に合わせて演奏するという遊び方を始めた。音楽に興味をもち主体的にかかわっていると捉えられる。

・子ども達ならではの発想によって遊びが展開継続している過程にある状態

ジュニアブロックを太鼓に見立て演奏するという、自分の思いを表現している姿、段ボール太鼓に鈴などの楽器を乗せて演奏することで音に変化することに気が付き、試しながら楽しむ姿から、K 児ならではの発想により、展開していると捉えることができる。

・遊びの素材を使いこなし、我がものとしていく状況

ジュニアブロックは 4 月から使い、慣れ親しんできた遊具のひとつである。ジュニアブロックの形に着目し、自分のイメージする太鼓を表現している。また、鈴などの楽器を段ボール太鼓と組み合わせ音の変化を楽しむ姿から、我がものとしていく状況だと考える。

○環境の構成

・憧れの年上児の存在

のびのびフェスティバルは 3 歳児にとって初めての大きな行事である。その為、自分達の踊りや競技も繰り返し取り組んでいた。その際、年上児の姿を目にすることが多かった。カッコいい衣装やアイテムを身につけて踊る年上児の姿は憧れの存在となっていた。憧れの年上児が近くにいることで幼児らの遊びは広がっている。

・自由に使える楽器やのびのびフェスティバルの時に使った CD

のびのびフェスティバルで各学年が踊った曲が入った CD を幼児らが自由に使うことができるように提示した。また、ドングリ楽器をつくって演奏したことをきっかけに、演奏ごっ

こが始まった。そこで、カスタネットや鈴、タンバリンを提示した。自分達で自由に使える親しんだ音楽が入ったCDや楽器があったことで、新しい遊び方を考え、取り組む姿につながったと考える。

・段ボール太鼓

段ボール太鼓は最初は身近な素材を組み合わせ、教師がつくって提示したものである。教師が幼児の目の前でつくったことで、幼児らは自分達も手伝ってつくったという思いをもつことができた。また、幼児らの太鼓のイメージにもあっていたことから、愛着をもち演奏する姿につながった。

○教師の援助

・ 幼児の興味に応じてアイテムを提示したり、アイディアを提供したりする

踊ることを楽しんでいた幼児らが、K児の音楽に合わせて太鼓をたたくという行為から演奏ごっこに遊びを変化させていった。その変化をみとり、段ボールと牛乳パックで太鼓をつくるという教師のアイディアを提供した。幼児らはその姿に興味をもち、自分達の遊びに取り入れて行った。幼児の興味に応じてアイテムを提示したりアイディアを提供したりすることが大切である。

<カンファレンスを終えて>

○教師の援助

・ 段ボール太鼓の使い方

今年度、テーブルをつくったり、家にしたり、隠れ家にしたりと段ボールを遊びの中で様々なものに見立ててきた。その為、幼児にとって段ボールは身近であり、大きなものや丈夫なものをつくる時には、「段ボールがいいんじゃない」という言葉が聞かれるようになっている。その為、太鼓をつくる時に、段ボールを利用しようと考えた。しかし、カンファレンスの中で、段ボールを平面にしてはりつけるのではなく、箱のまま利用した方が音が響いてよかったのではないかと話し合われた。また、幼児らは教師が予想した使い方以上に、工夫して使いこなしていた。教師は、幼児の姿に応じて、より柔軟に対応していく必要性を改めて感じた。

事例 3-1 「でも、足りないよ」

2月14日（木）

C児が「お寿司つくりたい」と言ったことをきっかけに、お寿司づくりが始まった。M教師と一緒に、C児、M児、A児らがつくり始めた。新聞紙を丸めたものを白い紙で包み、その上に魚に見立てた赤や黄色の紙を貼った。また、黒の色画用紙をのりで見立ててのりまきをつくった。しかし、かたづけの時間となってしまったため、声をかけた。

教師 「たくさんできたね。明日、この（牛乳パックの）家をお店にしたらいんじゃない」

M児 「いいね」

教師 「（家の前の）ここに、テーブルをつくって、食べる所にしたら？」

A児 「でも、足りないよ」

教師 「何が足りないの」

A児 「座って食べないとダメだから、どうする」

教師 「そうか……。椅子とか、ジュニアブロックとかで、座るところもつくったらいんじゃない」

M児 「そしたら、（お店の人は中から）『はいどうぞ』って、渡せるね」

教師 「明日、楽しみだね」

M児 「うん」

A児も、笑顔でうなずいた。そこで、空箱にお寿司を入れてかたづけることにした。

事例 3-2 「ありがとうございました」

2月15日（金）

A児は「お寿司もってきた」と、通園鞆の中から菓子箱を取り出した。中を見ると、折り紙などでつくった寿司が入っていた。

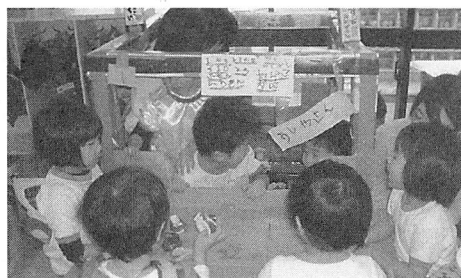
A児 「これが、マグロで、これが卵、これがサーモン」

教師 「すごいね。家で作ったの？」

A児 「うん。今日も、お寿司屋さんするから」

教師 「いいね。楽しみ」

A児 「うん」



M教師、A児、M児らが牛乳パックの家に集い、お寿司屋さんづくりを始めた。テーブルをつくり、椅子を並べた。E児、D児、H児らも加わりお寿司屋さんが始まった。

E児 「メニューもつくらんなんね」

E児は、A児、M児に、どんなメニューがあるかを聞き、紙に書いた。その後、M児が製作コーナーで看板をつくり店に戻ってきた。看板、メニューを貼り、店ができあがった。

M教師 「お客さんにわかるように、『いらっしゃいませ』って言ってみたら」

M児 「いらっしゃいませ」

A 児 「いらっしゃいませ」

そこに、B 児がお客さんになってきた。

M 教師 「A 児君、メニューを教えてあげてください」

A 児 「ここに書いてあるの」

B 児 「これ（メニューを指さして）いくら？」

A 児 「いくら。いくら（にする）？」

B 児 「これ（メニューを指さして）マグロでしょう」

A 児と B 児は一緒にメニューを見ながら「マグロ」と、確認していた。

H 児が、いくらのお寿司を運んできて、B 児に渡そうとしたが、受け取ってもらえなかった。

H 児 「いくらって言ったよ」

B 児 「違うよ」

A 児 「まだ、（B 児君）決めていないでしょう」

H 児は、お寿司を置いてもどっていった。

B 児 「サーモン」

すると、H 児が、B 児にサーモンを渡した。B 児は食べる真似をした後、店を離れた。A 児は、その様子をじっと見ていた。すぐに、B 児と F 児が店に来た。

B 児 「シーチキンください」

F 児 「マグロ」

H 児、D 児らがすぐにさらに寿司を並べて渡した。A 児は、マグロを手に持ち、皿を探している。皿を見つけると、マグロを皿にのせた。M 教師は「マグロきましたよ」と、F 児に聞こえるように声をかけた。A 児は、皿を F 児に手渡した。

B 児、F 児は食べる真似をして「ごちそうさまでした」と、店を離れて行った。M 教師が「ありがとうございました」と声をかけると、A 児も「ありがとうございました」と、笑顔で手を振って、二人を見送った。



<考察>

○遊び込む姿

・「没入している」状態、集中している状態

A 児が家で寿司をつくって園に持ってきた姿からも、お寿司屋さんを楽しみに登園していることがわかる。また、E 児や M 児らも自分で考えたことを教師や友達に伝える姿から、この遊びに興味をもちかかわっていると考える。

・子ども達ならではの発想によって遊びが展開継続している過程にある状態

最初、幼児らは寿司をつくることを楽しんでいた。しかしその後、お寿司屋さんにするために、看板、メニュー、テーブルや椅子など、それぞれが自分なりの寿司屋さんに対するイ

メージを表現し、店をつくっている。また、店ができあがると、お客さんとのやりとりをする幼児の姿が見られるようになった。このように、自分なりに楽しさを見つけ、遊びを展開継続していることがわかる。

・遊びの素材を使いこなし、我がものとしていく状況

うさぎ組の幼児にとって、寿司は身近であり、わかりやすいものであった。その為、幼児は寿司という同じイメージをもち、かかわることができたと考える。また、M 教師が提示した新聞紙や色画用紙などの素材、自分達でつくってきた牛乳パックの家は、これまで何度も繰り返し使ってきたものであり、自由に扱うことができるものであった。そのこともあり、自分達の遊びに取り入れることができたと考える。

○環境の構成

・拠点となる場所

牛乳パックの家は、これまでも様々な遊びの拠点になってきた場である。このような、自分達の拠点となる場所が明確になることで、幼児らが集い、かかわりがうまれる。また、周りの幼児らにとっても、その場が寿司屋さんになっていることがわかりやすくなっている。そのため、お店の人とお客さんというように、お互いの遊び方を尊重しながらかかわることができる場となっていた。

・これまでの遊びの共通体験

お店屋さんは、これまでも繰り返し行われてきた遊びである。2 学期には、教師がつくった食べ物や看板、テーブルなどを使ってお店屋さんを楽しんだ。また、4、5 歳児がつくった『うちゅうゆうえんち』に参加し、4、5 歳児がつくったいくつもの店に客としてかかわり、お店屋さんとお客さんというやりとりを体験した。このような体験が、うさぎ組の幼児らの共通のものとなり、同じイメージをもってかかわることにつながったと考える。

・身近な素材や用具

寿司や看板、テーブルなどをつくった素材や用具は、これまで繰り返し使ってきたものである。そのため、自分達の遊びに合わせて、組み合わせたり、加工して、必要なものをつくることができたと考える。

○教師の援助

・アイデアを提供する

教師は、遊びに必要なものを自分達でつくり、それらを使って遊んでほしいという思いをもっていた。そのため、寿司をつくって満足するだけではなく、つくった寿司を使って何か

できないかと考えた。そこで、店をつくることを提案した。幼児らにとって、お店屋さんのはわかりやすい遊び方であったため、受け入れられた。

・友達とのかかわりを促したり、かかわりのモデルとなったりする

A 児は、遊びに対する思いをもち、一つ一つじっくりと取り組む幼児である。その為、周りの幼児の動きに押されてしまい、すぐに行動に移すことができないことも多い。だから、M 教師は A 児がお寿司屋さんの中で友達とかかわり楽しむことができるように、A 児に寄り添い声をかけている。

M 教師は、A 児が自分で友達とかかわることができるように「いらっしゃいませって言うてみたら」「教えてあげてください」と、かかわりを促している。また、「マグロきましたよ」と、かかわりを支えている。さらに、「ありがとうございました」と、モデルとなっている。このように、支えてくれる教師がそばにいたことで、A 児は遊び込むことができたと考える。

< 1 年を振り返って >

	遊び込む姿	環境の構成	教師の援助
事例 1 6 月	・ゴールにボールを入れることを楽しむ姿 ・築山の高低差を利用して遊ぶ姿	・ゴールの位置 ・築山とゴールの関係 ・魅力的な場	・幼児の遊び方を認め、共に楽しむ
事例 2 11 月	・音楽に合わせて演奏する姿 ・いろいろな音を楽しむ姿	・憧れの年上児の存在 ・自由に使える楽器やのびのびフェスティバルで使用した CD ・段ボール太鼓 ・行事の取り組み	・幼児の興味に応じてアイテムを提示したり、アイディアを提供したりする
事例 3 2 月	・自分達でお寿司をつくる姿 ・自分達でつくったものを使って遊ぶ姿	・拠点となる場所 ・これまでの遊びの共通体験 ・身近な素材や用具	・アイディアを提供する ・友達とのかかわりを促したり、かかわりのモデルとなったりする

○遊び込む姿

・「没入している」状態、集中している状態

自分でやってみたい、やりたいと思うことに取り組むとき、幼児らの集中して遊ぶ姿を見ることができた。その為には、幼児らが**安心して取り組むことが最も大切なこと**だと考える。事例1のT児のように、不安な様子で登園していた幼児も、自分でやってみたいことを見つけて取り組むことで夢中になって過ごしている。さらに、**幼児一人一人が興味をもったことに自分からかかわることが重要**である。事例3のA児のように、園での遊びを家庭で再現し、再び園につなげている姿からも興味をもちかかわっていることがわかる。

・子ども達ならではの発想によって遊びが展開継続している過程にある状態

幼児らが自分達で遊びを展開しているとき、幼児一人一人が自分なりの**遊び方**を見つけていく。それは、友達の面白そうな遊び方を**真似る**（事例1）ことから始めている。そして、どうなるか**試したり**（事例1、2）、**自分の思いや考えを表現したり**（事例2、3）、**友達とのかかわり方を考えたり**（事例3）しながら、遊びを展開継続していることがわかる。

・遊びの素材を使いこなし、我がものとしていく状況

幼児らは、身近な自然、遊具、素材を遊びに取り入れ、**自分の体を使ってかかわっている**。その際、**繰り返し使ったり、様々な使い方を試したり**することから、自分のかかわり方を見つけている。事例1では繰り返しチャレンジする中で、築山の斜面の降り方、ボールの転がり方の面白さを知り、築山の自分達なりの使い方を**見つけた**。事例2では、ジュニアブロックの形の違いがわかり、自分のイメージする太鼓をつくった。さらに、楽器と段ボールの組み合わせ方により音が変化することを見つけている。事例3では、これまで使ってきた様々な素材や用具の組み合わせによって自分のイメージする寿司をつくることを知り、自分達の遊びに取り入れた。このように3歳児は、ものとかかわり自分達の遊びに取り入れ、それらを使いながら遊びを広げている。

○環境の構成

・安心して遊ぶことができる空間

幼児が遊び込むためには、幼児一人一人が**安心して遊ぶことができる空間**が何より大切である。特に初めて集団生活を送る3歳児にとって、自分達の遊びの**場が区切られていること**で自分のしたいことに集中して取り組むことができる（事例1）。また、自分の**遊びの拠点となる場**ははっきりすることで、自分の居場所がわかり、安心して遊ぶことができる。さらに、**遊びの場のもつ意味が明確になると**、その場で遊んでいる幼児だけではなく、周りの幼児もそれぞれの遊びの場でどのようにふるまえばいいかがはっきりし、わかりやすくなる（事例3）。その為、お互いの遊びを尊重しながらかかわることにつながっていく。

・自分達でつくり変えることができる身近な遊具や素材

幼児の遊びに応じて、必要な場やアイテムは変化していく。その為、幼児の思いやイメージに応じたものが必要となる。しかし、教師がすべて提示するのではなく、**幼児自ら試行錯誤し、つくりだしていくことができるものが大切である**。その際、幼児が自由に使うことができる楽器や親しんだ音楽が収録されている CD（事例 2）、遊びに必要なアイテムをつくりだす使い慣れた素材（事例 3）のように、幼児にとって**親しみのもてるものや繰り返し使ってきたもの**を提示していかなければならないと考える。

・憧れやモデルとなる存在

幼児の遊びは、おもしろい遊びをしている友達（事例 1）、いつでも見える場で活動している年上児（事例 2）、イメージするものをつくる教師（事例 3）を真似ることから始まっている。そして繰り返し取り組む中で新しい遊び方を見つけ出している。幼児にとって身近に**憧れやモデルとなる存在**がいることがとても大切であることがわかる。

・共通体験

初めて集団生活をおくる幼児が多い 3 歳児にとって、園生活そのものが幼児らの**共通体験**となっている。中でも、園庭で繰り広げられるのびのびフェスティバル（運動会）の取り組みは、本園の園舎の構造上、いつでも年上児の活動の様子を見ることができた（事例 2）。また、4、5 歳児がつくったお店屋さんに参加したことでお店に対する同じイメージをもちやすくなった（事例 3）。このような共通の体験が自分達で遊ぶときの土台となっている。

○教師の援助

・幼児の遊び方を認め、共に楽しむ

初めて園生活をおくる 3 歳児にとって、園でも安心して自分がやってみたいことに取り組めるようにすることが大切である。その為にもまずは、幼児がやってみたい、おもしろそうだった遊びを探り、園でも行うことができるようにしていくことが必要である。その後、ものとかかわりながら自分の遊び方を見つけた時には、その遊び方を**認め**、その面白さを**共に楽しむ**かかわりが大切になる。そうすることで幼児らは、園でも安心して遊ぶことができるようになると思う。

・アイディアを提供する

幼児らの遊び方や興味のもち方はさまざまである。教師は、幼児一人一人の興味に応じてその時に必要な**アイディアを提供していく**ことが必要である。サッカーごっこ場のづくり（事例 1）、段ボールを使った太鼓づくり（事例 2）、お寿司屋さんごっこの遊び方（事例 3）な

ど、その時幼児にどの様なことを学んでほしいのかを明確にし、3 歳児にとって身近で、わかりやすくなるような遊び方や使い方を提示することが大切である。また、幼児の柔軟な発想を支えるためにも、教師自身がより柔軟に対応していくことが必要である。

・ かかわりのモデルとなる

幼児らが友達と同じ場で遊ぶことでかかわりができる。しかし、なかなか自分ではどのように行動したり、声をかけたりすればいいかわからず、戸惑う幼児もいる。また、一見するとかかわっているように見えても、思いが通じ合っていないことも多い。そこで、教師は**かかわりのモデル**となり、幼児にとって友達とかかわりながら遊ぶために必要だと思うことを伝えていくことが必要である。幼児は教師がやったことを真似ながら、声のかけ方、ものの渡し方などを学んでいく。

